

IATSS三十周年によせて

紳士先生そして国際交通安全学会との出会い

栗原典善 (株)NORI INC. 代表取締役・デザインディレクター

本田技術研究所勤務の後、1979年イタリアのデザイン会社、82年ヨーロッパフォード技術開発研究所(イギリス・ドイツ)を経て、86年日本に帰国。デザイン会社DCIを設立、その後2001年デザイン会社(株)NORI INC.を設立。国内外の自動車デザインプロジェクトに関わり現在に至る。



あの時、私はヨーロッパの出張でエアーフランス・パリ直行便のいつものアイル席に腰を下ろしていた。離陸からしばらく、キャビンアテンダントが狭い機内を忙しく行き来し始め、美味しそうな匂いも漂っている。そろそろアペタイザーの時間。今日の私のお隣は、紳士然として穏和でやさしそうな感じだけれど、声をかけようか少し迷っていた。初対面の方との最初の会話はいつも少しの緊張感が伴う。どちらが先に声をかけたか記憶にないけれど、適度にアルコールが入り食事が運ばれてくる頃にはすっかりうち解けていた。なんでもご自身の研究分野の世界会議があってジュネーブに行くそうだ。どうやら工学系の学者らしい。

ちょっと堅苦しいかなと思いつつ、その印象が変わるのに時間はかからなかった。その紳士は私の仕事のことを興味深く根ほり葉ほり聞き始めた。なぜ、私の仕事にそんなに興味を持ったか、すぐにその謎が解けた。私の職業は車のデザイナー、その紳士は大学で交通工学の最先端の研究をしている著名な先生だった。道理で車に興味が……。なんでも、そういう研究はいろいろなところでセミナーをやっていて、先生たちも世界中を飛び回っているらしいのだ。で、12時間もの長いフライト、先生のお話は仕事のことから趣味の音楽、歴史やらグルメについてなど広い見識に溢れ、私は終始興味を持って聞いた。それは楽しい会話で、時間がたつのも忘れて瞬く間に目的地のパリに降り立ったような気がする。それから通り一遍の別れの挨拶をし、先生はパリからの乗継ぎ便でジュネーブへ、再び機上の人となり消えていった。

忙しい日々の中でいつしか先生との出会いも記憶から薄れかけていたが、そんな時、私のオフィスに一本の電話が。声の主はあのフライトでお隣だった紳士先生だった。先生がメンバーになられている、国際交通安全学会が、学会員を新規募集するので君を推薦するからどうかという。話をお聞きすると、私のような交通安全学など専門知識も持たない門外漢がお役に立てるような学会ではなさそうだ。第一、高尚な学会に品位を落としてご迷惑になりますよ、と。でも先生は毛色の変わったソフトが違う人がよいんだ、としきりにおっしゃる。お断りしようと思いつつも先生の巧みな話術に乗って、ついには推薦していただくことになってしまった。どうして私がメンバーとして迎えられたかは不明なのだが、毛色の変わった……という一点で理解できる。しかし確実なのは、あの紳士先生の説得力のある推薦内容が学会の選考委員を納得させてしまったことと、後で考えればすでに面接はあの機内ですませていたことだった。

あれから10年、研究部会や褒賞委員、研究企画委員などを経験させていただいた。特に褒賞委員会では交通問題とデザインに関わる活動にもスポットを当てることができ、それが褒賞に発展できたことはデザイナーとしての喜びだった。学会での仕事を通していろいろなことを学ばせていただいている。思えば、あの時、あのフライトで紳士先生と出会い、そして与えられた偶然がなければ、国際交通安全学会にも関わりを持つことがなかっただろう。人との出会いは本当に不思議なものだ。雲の上での紳士先生その人、青木正喜先生との楽しいお話はいつまでも思い出に残っている。出会いに感謝しつつ、毛色の変わったメンバーが微力ながらお役に立てればいつも願っている。